

NEWSLETTER

THE JAPANESE SOCIETY FOR
PARAPSYCHOLOGY

February 1979

No. 11

SKYLAB (宇宙ステーション) 予知実験

現在、軌道を回っているSKYLABは近く大気圏に再突入すると考えられております。この時期と場所に関しての予知実験を行いたいと、米国のMind Science FoundationのDr. Brandから依頼がありました。別紙に要領を紹介しましたので、宜敷くご協力をお願いいたします。

Mind Science Foundationは、昔同の「海外会報紹介」にも出ていたが、米国Texas州San Antonioにあり、所長はRNG(Random Number Generator)と超心理学実験に最初に導入したDr. Helmut Schmidtです。研究員として今回のSkylab実験の提案をしたのはDr. W. Brand、大学兼任の研究者、技術者が居ります。本研究の特色は、RNGを基本にした各種超心理学実験器具の用発と、生物学的研究にあります。Dr. Schmidtは物理学と超心理学との関連に興味を持っており、Dr. Brandは、Dr. StanfordのPMIR(psi-mediated instrumental response)モデルの案念に関心を持って研究を進めております。

研究機関紹介

Parapsychology at the University of Utrecht

by Martin Johnson

本大学に超心理学の研究室が作られたのは30-40年の大さとし最近のこと。本研究所で行っている主な研究は、1) psiとpersonalityとの関係、特にpsiとDefense Mechanism Testとの関係、subliminal sensory processとの関係、2) 動物特に薬剤の効果の研究、3) 心理生理学的研究、特にCNV(a surface negative brain wave)とESPとの関係、4) paraquatoの研究、5) observational theoriesの所謂 divergence problemの研究、6) subject effectとexperimenter effectの分離、などである。研究所は、超心理学研究に適したcomputer systemの開発を行っている。

年2回European Journal of Parapsychologyと、不定期にResearch Letterを発行している。(Psi News Vol. 2, No. 1より)

会務報告

学会ニュース

第130回月例研究会 1979年2月25日(日)1000~1700 大谷会館にて開催。出席者：祝輝之、金沢元基、菅原敏雄、木澤清一、恩田彰、大谷崇司、呂芳一。"Survivalの問題"をテーマに、金沢氏によるR. Moody: Life after Life 1975、—: Reflections on Life after Life 1977の紹介、菅原氏によるK. Osio: At the Hour of Death 1977の紹介が行われ、引続き活発な討論が行われた。Survivalと古い問題が、新鮮なテーマと近代的分析法によって再び超心理学に登場したことは、50-60年代の特殊な体験の調査という新しい方法の出現により、"意識"の問題、psiのmechanismの解明に新たな光を与えるものとなるかも知れない。

以上、K. Osioの ~~At the~~ At the Hour of Death は菅原氏による翻訳が完了し、本年5月頃出版される予定。

お知らせ

第131回月例研究会の開催

1979年3月25日(日) 1000~1600

於 学芸会館本館 東京都千代田区神田錦町 3-28

(電) 03-292-5931

テーマ PK(念力)現象

Uri Geller 効果について 呂芳一

Plant 効果について 大谷崇司

NEWSLETTER 1979年2月25日発行 © 頒価200円
編集・発行：日本超心理学学会

コンピュータで作った乱数列間の照合実験

大車正道

カード当りや乱数を当てる実験では人間の生物により"当てる"ことか行われといるので ESP により実際の一致数と理論平均との差が有意水準以上になることか起るが、双方の乱数列が機械的に作られたものである場合には ESP は働かないので差は有意水準以上にはなりにくいはずである。また ESP 条件下ではよく観察される position effect も機械的な乱数列の照合実験では起るはずはないと考えられる。

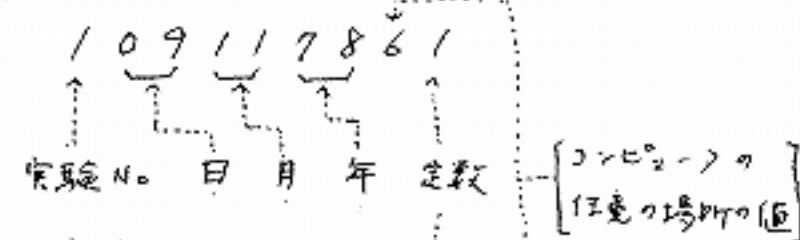
しかしながらある人々は"人間の意志の全く関与する余地のない乱数列間の一致を調べたとしても理論平均からのずれが有意水準以上の場合がけっこうある"と主張している。この主張が誤りであることは逆照合実験等により証明済みであるが、私は今回機械により充分ランダムな乱数を実際で作ったもの照合実験を行なうと結果をここに示した。

自動乱数照合実験: コンピュータで自動的に2系列の乱数列を作り、その乱数列間の一致の数を調べる。1 run が 100 個の乱数から成るので 100 trials の照合が行われる。乱数は 0 と 1 とで作られ、その一致数の理論平均は 1 run 当り 50 回である。100 run を 1 session とし 10 sessions 行う。次の結果をみる。

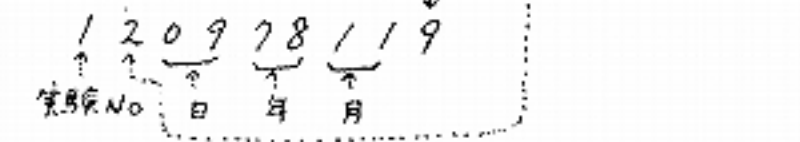
- (1) 1 session を通したの一致数とその CR.
- (2) position effect: 1 run を 4 等分した 25 trials ずつの 1 session を通したの一致数とその CR.

乱数の発生方法: 私の作ったプログラムで設定した 9 桁の 10 進数初期値として、IBM の乱数発生用プログラムにより、指定した値 (0.0) を中心として指定した広がり (± 1.0) で正規分布となるような 10 進数の乱数を得る。得た乱数は $-1.0 \sim +1.0$ に分布している。この乱数が負の場合には照合実験のため 9 乱数を 0 とし、正の場合には 1 とし、また 5 と 0.0 の場合には別の初期値により他の乱数を発生させた。初期値から 10 進数の乱数を発生するプロセスは向うの計算手順に基づいて行われ、私は今のところ知らない。9 桁の初期値は次に例示するようだが、必ずしも決まらぬよう、違ふ実験で同じ初期値を用いる可能性はない。

第 1 の乱数列の初期値



第 2 の乱数列の初期値



結果:

- (1) 各 session ごとごとの合計で有意な偏差はない。
- (2) 25 trials ずつみた場合も、ここにも有意な偏差はない。一定の傾向も特にみられない。
- (3) 各 session の合計でも有意な偏差は全くない。
- (4) 2 系列の乱数列の信頼性確認のため乱数列の 1 の数と一致数の有意な偏差はない。

No	照合結果		25 trials ずつの一致数の CR				1 の数の CR	
	一致数	CR	1~25	26~50	51~75	76~100	第 1 乱数列	第 2 乱数列
1	4999	-0.02	-1.52	-0.16	0.76	0.81	1.66	-0.76
2	4960	-0.20	-0.88	0.48	0.00	-1.20	0.66	1.54
3	4930	-1.34	-0.68	-0.88	-0.60	-0.52	1.84	-0.62
4	4981	-0.38	2.00	-1.04	-2.20	0.48	-1.16	-0.22
5	4991	-0.18	0.88	-0.20	-1.32	0.28	1.02	1.36
6	5041	0.82	-1.44	-0.64	2.48	1.24	0.02	0.40
7	5020	0.40	-0.52	0.96	-0.60	0.96	-0.86	-1.02
8	5050	1.00	1.56	0.72	0.96	-1.24	1.92	-0.32
9	5028	0.56	0.16	0.60	0.04	0.32	1.40	0.72
10	4918	-1.64	-1.04	-0.96	-1.08	-0.20	0.88	0.40
計	49921	-0.50	-0.47	-0.25	-0.49	0.32	2.33	0.47

J. Palmar: ESP and Out-Of-Body Experience: EEG Correlations. Presented at the 21th P.A. Convention. 1978.

紹介者 笠原敏雄

序論: 本報告は、OBE 能力を特に持った人に対する実験の報告であり、低レベル OBE と ESP との関係を探る実験の 4 - 2 では最後のものである。第 1 実験 (Palmer & Vassar, 1974) は、視覚的 sensory-bombardment を含む誘導法を用いたが、OBE の報告した S では psi-missing が、報告しなかった S では chance scoring がみられ、その差は有意ではなかった。第 2 実験 (Palmar & Lieberman, 1975) では、ガイド法を用いたところ、OBE を体験した S では有意な psi hitting がみられたが、報告しなかった S では

chance score である。今回の差は有意であった。オ3実験 (Palmar & Lieberman, 1976) では、いくつかの条件を整えた実験を行った。全般的には ESP スコアと OBE 報告との関係は有意とは言えなかったが、前回のカンリフェルト法を用いて成功した実験にできる限り近い条件で行った実験では、S 全員 (5名) が OBE を報告した。今回の実験では S に肉體移行を求めたわけであった。

本研究の主目的は、感覚遮断を用いて OBE を起こせた場合、OBE 報告した S には psi-hitting があるかどうか S には chance scoring が十分あるかを確かめることにある。副目的は示さずあるが、これはカンリフェルト法 (G法) と閉眼法 (CE法) の効果の差をみることにあり、もうひとつは、EEG との相関を得ることである。

方法: S: 男15名、女25名で大半は Univ. of Virginia の学生、20名が、無作為に G法と CE法を実施した。
使用器械: 3チャンネルのトランスミッター、ホログラフ等。

実験手続: Palmar が S に簡単な説明をしたあと、S に target の置かれた部屋を見せ、「部屋のイメージをよく憶えておくよう」求めた。それから、隣の実験室の入り口まで S を連れていき、電極の装着をし、G法を用いた S には、半分に割ったコンホンを眼に装着した。それから、Palmar は target の写真1枚、ゴール (5枚1組と10組) の中から、乱数表に従って抜き出し、ゴールの上を上向きに置いた。次に S が装着したヘッドフォンを通じて、9ラウンドの訓練を行なったから、教示を聞かせた。「眼をあけて、奥の壁を向いて立ってほしい。自分の体から離れたところから感じる感じが起つたら、隣の部屋にある写真をよく見てくださいを想像してください。あとは、自分の体から抜け去った感じがしたら、その感じが終わった時1回、その感じが特に納得のいくところを2回、写真のイメージがどのくらい浮かんだかを3回押しつけてください。この導出段階が始ると評価段階に入った。S に、実験の各段階で体験した反応、期待、体験内容を評価するための調査表に書き入れを求め、次の5枚の写真に自分のイメージに従って0~30まで評定をつけてた。

結果: G条件でも CE条件でも、session 中の体験描写には有意差はなかったが、成功の期待には有意差があった。評価表の OBE 報告と ESP スコアとの関係は、予想とは方向にはあったが有意ではなかった。ESP スコアは2条件間に有意差はなかった。ソフトウェア分析を行った EEG スコアと OBE との間にも相関はなかった。唯、目撃したことは、今回の標本中一番高かった OBE を体験したと思はれた S に、baseline EEG で異常に高い theta 比率 (39%) がみられたことである。

考察: 両条件の S の自己評価の分析から、G法は ASC の質と、G法ではほとんど違わなかった。しかし、結果の前 S の期待に及ぼす効果という点で違っている。G法は、理由は不明、単なる CE法よりも自信を相違へたようである。この実験から言えることは ESP の成功と「静かな」脳の状態との間に正の相関があることと、これまでの仮説を中から支持するということであろう。(12810月例会発表記録表)

SKYLAB (宇宙ステーション) 予知実験実施について

Dear Friend:

1974年2月8日、アメリカの宇宙飛行士は、我々の巨大な宇宙ステーション "Skylab" を宇宙に残して帰還した。Skylab は 1983年まで宇宙に残り、Space Shuttle が到達を待つ予定でしたが、control system の機能低下、抗力の増大により、当初予定していた時期より早く落下すると思はれるようになりました。最近のデータによると、Skylab は 1979年末または 1980年初めに落下するだろうと考えられています。もし太陽黒点の活動が活発になり、上空の大気の濃度が増すと、抗力が大きくなり、大気圏への突入が早くなり、それは 1979年4月から5月にかけての間にありたいと言はれています。

Skylab の重さは 99トン、そのほとんどは大気圏内で燃えつき、破片が幾つか地球に落下します。分析の結果、18トン~231トン の破片が大気圏再突入時までに残り、地球まで落ちることの可能性のある最も大きな部分は、エアロブレーキ (約 2.7トン) と鉛のフィルム保管箱 (約 1.8トン) であり、これは 1秒60m ~ 90m の高速で地球に衝突すると考えられています。

1978年12月15日、NASA は Skylab のコントロールを断念することにした。NASA の評価によると、もし宇宙船が1かたまりとして再突入せず、軌道上で破壊したら、より多くの破片が再突入するであろうと言われています。

さて、Skylab の地球への落下に興味のある方は、その落下の正確な時刻と位置が未知であることです。Skylab の軌道がカペラ (この再突入は北緯50°と西経15°南緯50°の間であります。この領域は、多くの陸地、北アメリカ、ヨーロッパ、アジア、南アフリカのほとんどのアフリカ、オーストラリアを含んでおり、その領域の3/4は海洋です。ここに最も大きな破片が、またはその集りが落ちる可能性があります。上空の大気は不確定であり、Skylab の抗力の性質がよく分かっていません。NASA の成人の評価によると、再突入の時間は、墜落の前後の12時間前に予測可能な位置は1時間以内にあると利明に示されています。

このように、Skylab の再突入は本質的に予測不

可能 (準予測) な出来事です。NASA は Skylab の破片の落下による損害の可能性は、隕石の衝突するよりも低いと見なされていますが、破片の破壊の可能性は低いわけではありません。このように重要で予測不可能な事件があることは、我々に対し非常に興味ある実験を提供することになります。現在、未知である Skylab の衝突の位置と時刻を "psychically" に予測することかできますか? この予知を証明するユニークな実験に是非参加して下さい。

以下で次の事をお願ひしたいと思います。

1. 次の同封の地図 (再突入の範囲である北緯50°南緯50°の間を示しています) をよく見て下さい。格子状の線は気にしないで下さい。
2. 最も大きな衝突が起こると思う地点を、地図上に "X" で記入して下さい。Skylab の破片は1517キロに落ちる可能性があります。再突入の軌道に沿った広い範囲に落ちると思われています。破片の最も多く落ちる地点を予測してください。論理的に考え、あなたが最初に得た psychic impression に従って地図上の1ヶ所に EPE をつけて下さい。
3. 衝突の起こる日・時について psychic guess をし、それを下の欄に記入して下さい。
4. 上欄に所望の現象を記入して下さい。

以上、出来るだけ早く、送達して下さい。結果はお知らせ致します。

William G. Brand.

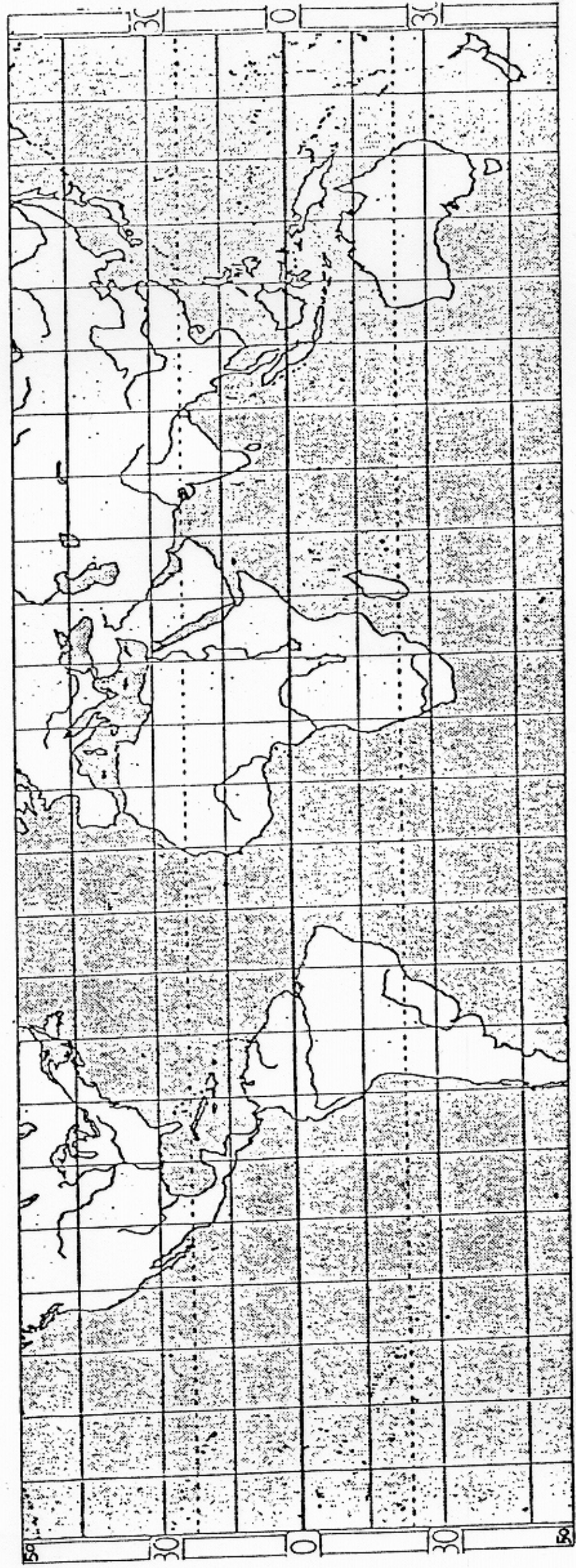
お願い

上記のようなお手紙が参りました。是非この実験に参加して下さる様お願い致します。必要事項を記入 (日本語でも結構です) して、同封の封筒を事務局までお送り下さい。おねえ米國へ送ります。(地図の別紙と一緒に同封致します)

NAME _____ AGE _____ SEX _____

ADDRESS _____

DATE ON WHICH YOU ARE MAKING YOUR PREDICTIONS (I.E., TODAY'S DATE) _____



On the map above, please place an "X" to indicate your psychic guess of the location of greatest impact of the Skylab space station debris.

In the blanks to the right, indicate your psychic guess of the exact time and date of impact of Skylab space station debris

TIME _____ AM _____ PM

_____ day _____ month _____ year

* NOTE: This map indicates the entire 50°N to 50°S area of the globe over which Skylab orbits; other areas have been eliminated.